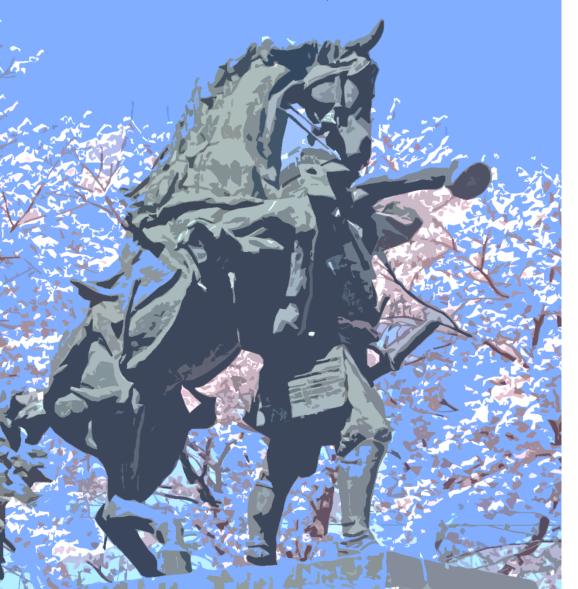
# 武者と生まれて描く虹

~ 畠山重忠伝説~



本書は、平成19年度の「広報ふかや」に掲載された 畠山重忠公を紹介する連載記事「武者と生まれて描く虹 ∼畠山重忠伝説~」を冊子形式に改めて、一部修正する などして整え直したものです。

2021年3月

畠山重忠について、深谷市ホームページで、より詳しく紹介中!

深谷市 畠山重忠について 検索



#### 1. 17歳の美少年

畠山重忠は、長寛2年(1164)に深谷市内畠山の地に生まれたといわれている。「畠山重忠公史跡公園」の隣接地にある古井戸を、地元では「重忠公産湯の井戸」と称しているが、その事実を確認することはできない。
しんべんむさしょどきこう
新編武蔵風土記稿には「城蹟の辺に重忠の井と唱ふる古井二あり」とあるが、これがその中のひとつと考えられる。

重忠は幼名を氏王丸といい、母は三浦義明の娘である。治承4年(1180) 8月、源頼朝が平家追討の兵を挙げた時には17歳でありながら、その時京都にいた父重能に代って一族を率い、大庭景親の求めに応じて平家側に味方して相模国まで兵を進めた。

その際に些細な手違いから伯父三浦義澄と戦いとなり、重忠は三浦氏の 衣笠城を攻めた。しかし、戦力的に優位であったにもかかわらず、重忠は 三浦氏にわざと退路を敷いた。実は背後には大庭景親が迫ってきていて、 重忠が攻撃を仕掛けなければ、大庭軍の総攻撃で三浦氏は滅亡していたか も知れなかった。

義澄はやむなく城を後にしたが、重忠の心をその布陣から読み取った祖 父義明は、「重忠の華ある武者振りに武門の意地で応戦せねばなるまい」 と衣笠城に居残り見事討死し、名を残した。

頼朝は、衣笠城を逃れた三浦義澄と落ち合い、さらに千葉氏や上総氏総勢3万の大軍を房総で得て、鎌倉を目指した。頼朝軍が隅田川のほとりまで来たとき、見目麗しき美少年が立っていた。畠山重忠だった。初めて重忠を見た頼朝は、「関東一の豪の者」という評判と、見た目のギャップに驚いた。

# 2. 華ある若武者

ながり

平家方と目される畠山重忠が、隅田川のほとり、長井の渡しで源頼朝と 会ったのは偶然ではなかった。

重忠はそれより少し前、衣笠城の合戦に勝利した後、京にいる父重能から、頼朝に味方せよという書状を受け取っていた。書状を見て、態度を決めかねていた重忠は、郎党の榛沢成清に意見を聞いた。成清は「平家は当時一旦の恩、佐殿(頼朝)は相伝四代の君なり」と頼朝側に付くことの道理を説いた。重忠は成清の言に従い、長井の渡しで頼朝に帰伏した。

頼朝は激怒していた。父亡き今、親とも慕う三浦義明を殺した憎き敵、 畠山重忠が目の前に立っているではないか。頼朝は重忠に、三浦氏を討っ たことを厳しくとがめた。これに対し重忠は「三浦氏を討ったのは些細な 行き違いによることです。義明殿や義澄殿に決して恨みはございません。」 と釈明した。義澄を呼んで問いただすと、義明は死に花を咲かせてくれた 重忠に感謝しながら、自ら望んで討ち死にする道を選んだと言い切った。 さらに重忠は、三浦庄を我がものとせず、大庭景親を引き上げさせて人々 を安堵させ、自分はすぐに引き返したとも証言した。この若さにしてかの <sup>きようたん</sup> 華ある戦振り。頼朝は驚嘆した。

頼朝は、この17歳の若武者を許したばかりでなく、武将として最高の名誉である鎌倉入りの先陣を命じた。このことは、その帰趨が心配されていた武蔵武士団を、完全に掌握しようとするための措置であったが、重忠のこの男ぶりに、頼朝がたちまち惚れ込んだことも遠因であった。

# 3. 宇治川の先陣

関東随一の名族・秩父氏の直系畠山重忠が頼朝軍に加わったことにより、 武蔵、相模の武士たちは相次いで頼朝のもとに集まった。こうして関東から平氏の勢力は一掃された。

頼朝が挙兵して間もなく、木曽義仲も以仁王から平家追討の令旨を得て、挙兵した。義仲は大蔵館(現嵐山町)で生まれたといわれ、2歳の時に父が殺され、義仲も殺されそうなところを、重忠の父重能らに助け出され一命を取り留めた人物である。義仲の祖父は源為義で、頼朝とは従兄弟にあたる。挙兵した義仲は各地で平氏の大軍に連勝し、京に上るとごしらかわほうおう あさひ 後白河法皇から 旭(朝日)将軍の称号を得た。

しかし、義仲の京での行状をみた法皇は次第に義仲と対立し、ついに元暦元年(1184)に鎌倉の頼朝に向けて義仲追討の命を出した。

頼朝は弟の範頼と義経に6万騎を与えて近江国へ進出させた。重忠は源義経軍の先陣に属して義仲と宇治川に戦った。『平家物語』『源平盛衰記』には、重忠が丹党500騎を率い、真先に宇治川を押し渡った逸話が載っている。重忠は愛馬を射られ担いで渡河している時、馬を流されたえばして、おおくししげちから帽子子の大串重親が助けを求めたため、大力の重忠は重親をつかまえて対岸に放り投げ、重親は徒歩立ちの一番乗りの名乗りを上げたという伝説が残されている。

『源平盛衰記』では重忠は三条河原で義仲軍の女武者巴御前と一騎討ち を演じ、怪力で巴の鎧の袖を引きちぎり、巴は逃げ出したと記録されて いる。

この宇治川の戦いで範頼、義経軍は勝利し、源氏の一方の旗頭である 義仲は、31歳で短くも激しい生涯を閉じた。

# 4. ひよどり越え

木曽義仲を討った範頼、義経軍は、続いて平氏を追って西国へ向かった。 重忠もそれに従い元暦元年(1184)2月7日、平家が陣を構える一ノ谷の 背後にそびえる「鵯越」へ到着した。

源平盛衰記は、「義経鵯越を落す並に畠山馬を荷う付馬の因縁の事」の項で、「畠山は (中略) 壇の上にて馬より下り、差しのぞいて申しけるは『爱は大事の悪所、馬転ばして悪しかるべし、親にかかる時子にかかる折と云う事あり、今日は馬を労わらん』とて、手綱腹帯より合わせて、七寸に余りて大いに太き馬を、十文字に引きからげて、鎧の上に背負うて、椎の木のすだち一本捩切り杖につき、岩のはざまをしずしずとこそ下りけれ。あずまはち、東八か国に大力とは云いけれども、只今かかる振る舞い、人倫には非らず、誠に鬼神のしわざとぞ、上下舌を振いける。

(中略) 畠山は此の岩石に馬損じてはふびんなり、日頃は汝にかかりき、今日は汝をはぐくまん、と云いける。情深しと覚えたり」と記している。 重忠は範頼軍に属していたという説もあるが、重忠の人柄を偲ばせる大切なエピソードである。

#### 5. 屋島の戦い

さぬきこく

一ノ谷の合戦で源範頼・義経軍に敗れた平家軍は、讃岐国屋島へと逃れ た。

おおものがうら あわ かつうら

元暦2年(1185)2月、源義経は摂津の大物ヶ浦から阿波の勝浦に渡り、 さらに進んで讃岐の屋島に進んだ。

大物ヶ浦を出航する時、戦奉行梶原景時は、「逆櫓」の進言をする。 へきき とも っ っさき こと。 敵が強い時は 舳 の方の櫓で押戻し、敵が弱ければ元のように艫の櫓をもって押し渡す」と言った。 しかし、義経がこれを一蹴した。 景時は「将たるもの、あらゆる場面を想定して準備 怠 ることなきとすべきもの」と反論したところ、

義経は「主人を猪武者と愚弄するか」と怒った。景時は「なにお、主人は 鎌倉殿一人にてござる」と反駁した。

2月18日午前2時、暴風雨の中、義経は船を出す。兵船は数多あるが、 大風のため船を出す者はわずかに五艘。一番が判官(義経)船、二番が畠 山(重忠)の船、三番土肥船、四番和田船、五番佐々木船である。

勝浦に到着し、そこから屋島へ渡り、平家軍と一進一退の攻防を続けた。 いつしか休戦状態になり、辺りが静けさを取り戻した時、静かに一隻の船 が義経軍の前に姿を現した。

そこには美しい女官が、「これを射って見よ」とばかりに扇をかざした。 重忠は、扇の的を射よと義経に命ぜられるも固辞し、那須与一を推した。 与一は馬を海に乗り入れ、「南無八幡大菩薩」と叫び、見事に扇の柄を射 抜き、扇は空を舞い海に落ちた。「平家物語」の名場面「扇の的」である。

#### 6. 頼朝の最期

いまわ きわ

だんのうら

元暦2年(1185)3月、範頼・義経率いる鎌倉軍は壇ノ浦の海戦で平家を滅ぼし、頼朝の勢力は全国に及ぶようになる。この頃、勢いづく義経に対し、逆櫓の一件で恨みを持っていた梶原景時は、義経についての讒言を頼朝に行う。それを知らぬ頼朝は、後白河法皇を動かし義経追討の院宣を引き出してしまう。翌文治2年、頼朝は義経を追いつつ、捕らえていたしずかごぜん つるがおかはちまんぐう 静御前に、鶴岡八幡宮での舞を命じた。その際、銅拍子をつとめたのが重忠だった。重忠は智仁勇を備えているばかりでなく、風雅の心にも通じていた。

すがややかた

義経亡き後、梶原景時の策略は重忠に向かった。本拠の武蔵国菅谷館に下向していた重忠が謀反の準備をしていると、頼朝に申し立てたのだった。重忠はそれを聞いて「このような恥辱は耐えられん」と 徐 に刃を抜くや自害を図ったが、幸い周りに押さえられ命は取り留めた。その後、景時は重忠に、全く謀反心がないなら起請文を書けと命じるも、「源家を主と仰ぐ身で二心などあるはずない」と重忠はきっぱり断った。それを聞いた頼朝は特に重忠を咎めることをせず、かえって重忠への信頼を厚くした。頼朝は文治5年(1189)3月の奥州討伐や建久元年(1190)の上洛に際し先陣を重忠に命じたのだった。

建久3年(1192)、頼朝は征夷大将軍に任じられ、日本の歴史は大きく転換する。しかし、正治元年(1199)正月、頼朝は落馬がもとで亡くなってしまう。

頼朝は今際の際に重忠を呼び寄せ、幕府の後事を託した。重忠はこの言葉を堅守しようと心に誓った。しかし、その重忠の忠誠心が重忠自身の最期を早めようとは、知る由もなかった。

#### 7. 北条氏の謀略

建仁2年(1202)、頼朝の嫡男頼家に征夷大将軍の宣が下された。しかし、妻若狭局の実家である比企氏を重用したため、幕府内の有力御家人に不穏な空気が漂った。建仁3年8月、頼家が急病となると、北条時政の主導で頼家死後の相続は弟千幡(実朝)と子の一幡に分譲する命が出される。病床の頼家は自分の知らない間にこのような命が出されていたことに驚き、舅である比企能員と北条氏討伐を計る。しかし、そのことを知った時政は比企氏に謀反の疑いありと能員の館を急襲し、北条家と肩を並べた大御家人・比企一族は歴史から姿を消した。一幡とその母若狭局も殺害され、更に頼家も伊豆修善寺に幽閉され、何者かに暗殺されてしまったのだった。

元久元年(1204)三代将軍となった実朝は、時政の妻牧の方の縁続き、 京都の貴族坊門信清の娘を迎えることとなり、重忠の嫡男重保も使者と して京へ向かった。その途中、牧の方の娘婿である平賀朝雅の館に宿を 求めた時、重保と朝雅の間で諍いが起こった。前武蔵守の朝雅と源家に 忠誠を尽くし武蔵国留守所惣検校職として武蔵国政の実務を見ていた父 重忠との対立が伏線であったかもしれない。

このことをきっかけとして、源家を弱体化させ幕府内での主権を狙う時 政は、源家に尽 忠する畠山氏の討滅の決意をした。

元久2年4月、時政は娘婿の稲毛重成を武蔵国から鎌倉に招聘し謀議を重ねた。重成は帰郷中の重忠へ宛てて「当時鎌倉中兵起有る」という手紙を届けた。

時政の謀略を知らない重忠は、重保をまず鎌倉へ先発させた。 6月20日夕刻、重保は鎌倉に到着した。

# 8. 二俣川の朝露に

元久2年(1205) 6月21日、北条時政は子の義時と時房に畠山重忠を 討つ計画をはじめて明かした。義時は、「重忠は頼朝に忠節を尽くし篤く 信任されていた。その彼が幕府に対して謀叛を企てることなどありえない」 と、計画の中止を訴えたが、時政に聞き入れられることはなかった。

そのような陰謀が進んでいるとは思いもしない重忠は、6月19日、菅 谷館を出立。鎌倉街道を南下していた。

6月22日早朝、鎌倉の御家人たちに「謀叛の輩を誅せらるべし」という幕命が下り、御家人たちは武装して由比ガ浜へ馬を走らせて行った。父・重忠の留守を守っていた畠山重保も、わずかに郎従3人を率いて由比ガ浜へ走った。しかしここで待っていたのは、重保追討の命を受けていた三浦義村の手勢であった。重保はここで謀られたと察したが、多勢に無勢、重保は奮戦するも、ここが最期の地となってしまった。

重忠は軽装の旅姿であった。従者は次男の畠山重秀と本田近常、はんざわなりきよ 榛澤成清の二将以下136騎で、朝露が降りた二俣川に到着した。重忠はここで前方に大軍が立ちはだかることに気づき、それが自分たちを追討するために出陣してきた鎌倉勢であることを知る。近常と成清は、「菅谷館へ戻って軍勢を整えましょう」と主張した。しかし重忠は、「謀反心など少しもない。ここで 潔 く戦おう」と、言い放った。

# 9. 典雅の後裔

愛甲三郎季隆の放った矢が重忠の体を抉った後、他に数本の矢を体で受け止め、重忠は遂に絶命した。重忠の首は季隆によって北条義時のもとに運ばれたが、義時は溢れ出る涙で、この亡き友人の亡骸をはっきりと見ることができなかった。

畠山重忠は、典型的な武蔵武士として評価されている。しかし、武士道の中核を成す「倫理的な忠誠」の意識は当時は必ずしも高かったわけではない。中世期の主従関係は主君と郎党間の契約関係であり、奉公とは御恩の対価であるとする観念が強かった。こうした時代にあって、重忠は武勇、忠義、礼儀、実直、質素を旨とし質実剛健、清廉潔白で、しかも情けを心得ていた。その上、風流の道にも通じていたという、後の時代の武士の鑑であり、この時代にあっては稀有な存在だった。

重忠亡き後、承元4年(1210)5月、重忠の妻、いわゆる「重忠後家」の所領については、そのまま安堵されることが認められている。この「後家」については、義時の妹と推定され、後に足利義兼の庶子・足利義純に再嫁し、畠山氏の名跡を再興している。義純の子孫は「畠山」を称し、近ば野波家、細川家と共に室町幕府の三管領の一家として繁栄した。江戸時代には幕府における儀式や典礼を司る高家に列せられる程の名家となり、重忠の重んじた礼儀や典雅の心は遠く江戸期にまでも息づいていた。

国は武蔵の畠山 武者と生まれて描く虹 剛勇かおる重忠に いざ鎌倉のときいたる

「重忠節」より

# 武蔵士の鑑